

わが心の自叙伝

音原洋一

.....▷22

昭和から平成へ。私は昭和最後の年末、「紅白歌合戦」出場者の中で最若年齢者になっていた。年号が変わったこともあり私にも卒業の時期がきた。自分の音楽を表現するコンサートやディナーショー中心のライブスタイルへの変貌の時期でもある。

娘や息子たちも成人し独立、それぞれ家庭を持ち、ちよっと胸をなで下ろし60代から70代への道を歩き始めた。同時に現在は顧問職にあるが、多忙にまかせて参画できなかった日本歌手協会の理事にも復活、理事会などにもできるだけ参加するようになった。

そんなある日の会議でのことだ。徳間ジャパンと日本歌手協会が合同で歌手協会レーベルを立ち上げるといふ話が起き上がった。私はそれまで在籍していた会社からちよっとフリーにな

アメリカの大学の卒業式で息子・長男の英介さんと筆者



息子・英介

つていたこともあり、「私の歌ではだめかな？」と発言した。実はちよっといい作品が私の手元があり、それをレコーディングしたいなど思っていた矢先でもあったのだ。その曲は息子の英介が私の喜寿、77歳の誕生のお祝いに贈ってくれた作品だった。

英介は高校卒業後、私に「アメリカで勉強したい」と告げた。音楽で人の心を治療する方法を探りたいのだと言う。その選択は親にとって心配でしかなかった。「勉強は日本でもできるだろう」と話したが、彼の決心は固かった。

ふと自分が高校を出た後、親

の反対を押し切って音楽の道に進みたいと願った遠い日々が頭の中を巡った。同時に、あのときの私の父母もこんな心配の気持ちで先に立ち反対したのだろうな...と感じた。私は親に逆らって何とか成功の道を歩めたと思うが、息子はどうかだろうか？ だが私のときと同じように息子は希望を胸に単身渡米したのだった。

彼は大学で心理学と音楽を専攻し、そこから音楽とのふれあいを通じ人の心を癒やすことはできないかと考え、10年余りの月日を費やし作業療法士の資格を手に入れた。親ばかりの典型のようだが、「よく頑張った！ さすがわが息子」などと喜んだものである。

その後、英介は東京の病院に勤め始めたが、ある日、私は息子に頼まれて病院へ足を運んだ。彼のピアノ演奏で患者さんたちを前に歌うことになった。まさにこれが音楽療法というも

のなのだろう。目を疑った。

私の歌を聞きながら、それまで表情が暗かった人や話すらしなかった人の顔が見る見る明るくなっていくのが、手に取るように分かったのだ。私は涙を禁じ得なかった。歌うということとはこういうことなのだ、あらためて教えられた気がした。

英介はピアノだけではなく作曲もしていた。そんな彼からの喜寿のプレゼントがその曲だったのである。早速、歌手協会レーベルの第1号曲に決まったのだが、困ったことが発生した。実はこの作品は曲のみで詞が付

けられていなかったのだから。私はすぐさま旧友のなかにし礼に連絡を入れた。ダメもとだったが、当時、なかには作詞活動より作家として直木賞まで受賞する人間になっていたからである。そんななかから返事が届いたのは、しばらくしてからのことだった。(すがわら・よういち||歌手)

音楽で心の傷を癒やす